

アイデンティティ概念再考

大野 久

1. はじめに：アイデンティティ概念を再考する意味

2020 年 3 月をもって、24 年間勤務した立教大学を定年退職となる。そこで 40 年以上、研究に取り組んできたエリクソン (Erikson, E.H.1959) のアイデンティティ概念について再検討を行いたいと思う。

その理由は、アイデンティティ概念そのものに、まだ未解明の部分がたくさんあること、また、時代の変遷の中でアイデンティティ概念の解釈が歪められてしまい、数多くの誤解を生み、さらには青年たちに対する弊害さえも散見されるようになったこと、さらに、アイデンティティ概念が含まれるエリクソンの漸成発達理論に関しては、ほとんど研究が進んでおらず、アイデンティティ概念よりもさらに未解明の部分が多いことなどである。

また、研究や論文執筆のみならず、教職科目や現代心理学部の「青年心理学」等を講義して来て、リアクションペーパーやレポートなどを通して、青年たちの生の声を長年聞いていた結果、本来のアイデンティティ概念を正しく伝えることが、青年たちの人格形成や親子関係、将来の進路選択などに有用である実感を持った。在学中の学生自身にとっても関心の高い問題ではあるが、教職課程を卒業した学生たちが教育現場に立ち、中学生、高校生たちにアイデンティティ概念の正しい意味と進路選択についての考

え方を伝えることが重要であるように考えた。

さらに、今年度から参加した本学の中高年の社会人を対象とした立教セカンドステージ大学の授業での受講生との出会いのから、一般的にリタイアしたと表現される老年期にあってても学び続ける意味を強く実感したこともこの論文執筆の理由の一つでもある。

2. 漸成発達理論の中のアイデンティティ概念

一般的に単独の概念として語られることが多いアイデンティティ概念は、エリクソン (Erikson, E.H.1959) によって提唱された漸成発達理論の第5段階青年期の主題である。この漸成発達理論とは、数多くの臨床経験や子育て支援のフィールドワークなどを通じて構築した理論であり、周知のように自我心理学の立場から人生を8段階に分け、その各段階での人格発達の主要な主題、重要な関係 (環境)、主題を活性化する活力などを示したものである。したがって、アイデンティティ概念は、単独で理解するのではなく、一生の生涯発達の中でとらえることが重要である (Fig.1)。しかし、アイデンティティ概念が生涯発達の中で語られることはあまり多くない。そこで本論文では、生涯発達の観点からこの問題を検討していく。

VII								自我の総合 対 絶 望
VI							世代継承性 対 停 滞	
V						親密性 対 孤 立		
IV	時間的展望 対 時間的拡散	自己確信 対 自意識	役割実験 対 否定的 アイデンティティ	達成の期待 対 労働麻痺	アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散	性的 アイデンティティ 対 両性の拡散	指導性の 分極化 対 權威の拡散	イデオロギーの分極化 対 理想・価値の拡散
III				動 勉 対 劣等感	労働同一化 対 無益さの感覚			
II			自主性 対 罪悪感		役割予期 対 役割制止			
I	基本的信頼 対 不 信	自律性 対 恥・疑惑			自分自身であるべき意志 対 自己疑念			
	1	2	3	4	5	6	7	8

Fig.1 漸成発達理論図 (Erikson, 1959 岡本 2018 による)

3. アイデンティティ概念の内容

アイデンティティ概念は、高校での公民科の授業や進路指導などの中で、「自分らしさ」、「自分の本当にしたいこと」、「将来になりたい職業」などとして語られることも多い。しかし、本来のアイデンティティ概念は単に、「自分らしさ」や「将来になりたい職業」ではなく、こうした教育が高校生たちを混乱に陥れていることについては、すでに議論し批判した (大野 2014)。

アイデンティティ概念を再検討するためにその基本的なポイントを押さえておく次のようになる。

まず、エクソンはアイデンティティそのものを定義していない。その代わり、アイデンティティの感覚 (a sense of identity) を定義している。具体的には「内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力 (心理学的意味での自我) が他者に対する自己の意味の不変性と連続性に合致する経験から生まれた自信」 (Erikson, E.H. 1959) と定義されている。長くなるが、すでに著者自身がこの定義について解説した部分を引

用してみよう (大野 2014)。

「内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力 (心理学的意味での自我)」が主語であり、それが「他者に対する自己の意味の不変性と連続性」と「合致する経験」があり、その経験が「自信」を生み、その「自信」が「アイデンティティの感覚」である。

次に、この定義の中の「不変性」と「連続性」という概念について考えよう。「不変性」の原語は sameness であり、「斉一性」と訳す方がより原意に近いという議論もある。不変性とは「自分はまとまりを持った一個の人間であり、自分は一人で他に同じ人間は存在しない」という認識である。この認識は、健全な人間であれば誰でも自明に持っており、疑うことはない。しかし、病的には、この不変性が崩れる現象も存在する。たとえば、解離性同一性障害 (多重人格障害) は、「私はまとまりを持った一人の人間」という不変性の感覚が崩れた例である。また、「連続性」の原語は continuity である。「過

去の私も、現在の私も、未来の私も同じ私である」という認識である。この認識も「不変性」と同様、健常者にとっては自明である。しかし、病理において記憶喪失は本人の認識において、連続性が崩れてしまった例といえる。

次に「内的な」と「他者に対する自己の意味」について考えよう。定義の中で、合致するものは前半の「不変性と連続性を維持する各個人の能力」と後半の「不変性と連続性」なのであるが、前半を修飾する言葉は「内的な」であり、後半を修飾する言葉は「他者に対する自己の意味」である。

「内的な」とは、「主観的な」と同義であり、話さなければ他者には伝わらない個人的認識である。例えば「私は昔から芸術家を目指して生きている」などである。これに対して「他者に対する自己の意味」とは、その人物が生きている意味の世界である全生活空間における「他者」に対する自己の存在の意味である。ここでいう他者とは、時として日常的具体的な人間関係と、それを超えた業界とか、学界、社会、世界のような観念的な対象をも含み込んだ他者である。

つまり、アイデンティティの感覚とは、「社会の中で～としての自分（たとえば芸術家）は、他の誰とも違う自分であって自分は1人しかいない、かつ過去の私も現在の私も将来の私も私自身であるという感覚と、その役割をとっている私を囲んでいる他者（芸術家に対しては、それを鑑賞する大衆、ファン、芸術中間、芸術に関する業界、批評家、地域社会）などから、あの人物は他の誰とも違う人物であって、あの人物は1人しかいない、か

つ過去も現在も将来もあの人物は同じ人物であらうと思われているであらうという感覚が合致していることによる自信」ということになる。しかしこの説明はあまりにも抽象的なので、日常生活の中でのアイデンティティの感覚にあたるものを考えると、たとえば教師になって、1,2年は自信がないもの3年から5年すると、相対的に授業も安定してできるようになり、生徒からの相談にも的確に回答できるようになる。初任時よりは生徒、同僚、上司からの肯定的な評価を受ける可能性も高くなり、「生徒から教師として認められるようになった」、「職場で一目置かれるようになった」、「重要な仕事を任せられるようになった」といった感覚がアイデンティティの感覚に最も近いように思われる。

こうした状況から、大野（1995,2010a,2010b）は、アイデンティティの感覚を社会の中で～としての「自覚、自信、自尊心、責任感、使命感、生きがい感」の総称であると解説した。

加えて、ここでいう～の感覚（a sense of ～）は重要である。これはエリクソンの発達理論の中で各段階の重要な主題として繰り返し、現れる考え方で、「こうした『感覚』は、表層にも深層にも浸透」しており、「1. 内省を通して接近することができる意識的な経験の仕方であり（この経験はまさに内省することによって発達する）、2. 他者によって観察可能な行動の仕方であり、3. テストや分析によって判定できる無意識の内的状態である」と説明されている（西平 2011 P.52）。つまり、社会におけるある役割についてのアイデンティティの感覚

である「自覚、自信、自尊心、責任感、使命感、生きがい感」は、自分が内省することで確認できる意識的な経験（たとえば自分が教師であると信じていること）であり、他者から見てもその人はそう行動している（教師らしく振舞っている）し、本人が書くものの中や心理学のテストなどに対しても無意識に現れる（本人がそのつもりでなくても、知らず知らずに教師らしさが表現される）ということである。

4. 自己のアイデンティティを定義づけるもの

次に、自己のアイデンティティを定義づける役割の数について検討しよう。一般に「内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力（心理学的意味での自我）が他者に対する自己の意味の不変性と連続性に合致する経験から生まれた自信」（Erikson, E.H. 1959）の定義に示された自信がありどころは、「職業」に関するものと解釈されることが多い。しかし実際には、職業人として職場である学校では「教員」であり、自宅に帰ると妻に対しては「夫」であり、子どもたちに対しては「親」であり、週末、孫に対しては「祖父」である。さらには、幼なじみの知人にとっては「友人」であり、趣味のサークルのメンバーに対しては「仲間」である。それぞれの状況それぞれの相手に対して、行動も考え方も話し方さえ変化する。しかしまた一方で「大野久」という個性を持った一人の人格は統合されており、価値観、考え方、話し方などはある一貫したパターンを維持している（「自我の統合機能」と呼ばれる）。

さらに、その一つひとつの社会的役割に～としての「自覚、自信、自尊心、責任感、使命感、

生きがい感」がある。例えば、「教員」としての役割に対して、自分は大学教員なんだから、その「自覚」を持って、事に当たらなければならないし、例えば当然ながら、パワハラやセクハラなどしてはいけないだろうと思う。また、もう35年以上もこの仕事をしているので、多少の「自信」や「自尊心」はある。ただしこの自信や自尊心も人より優れているというのではなく、人並みのことはきちんとできている、人から後ろ指を指されることはないと思っている。さらに、「責任感」は強く感じる。学生の成績の入力は決して間違っはけないし、学生の進路の相談に関しても責任ある回答しなければならない。また自分のかかわる教員養成が将来の日本の教育に何らかの貢献につなげたいというわずかではあるが「使命感」を思っている。最後に、学生や卒業生、教育関係者などから、時折、もらう感謝の言葉に対しては、大きな「生きがい感」を感じるなどという内容が、「教員」としてのアイデンティティの感覚なのであろう。

人はキャリアの中で職業人である期間は、こうした内容を自覚したり、感じ取ったりする機会が多いのではあるが、そういう役割を強く意識しない、もしくは感じる機会が少ない社会的役割に対しても、人は同様な感じ方をする。例えば、月に一回だけ参加する「社会的サークルのメンバー」であることに關しても、自分がその趣味を続けていることに確かに「自覚」がありそれが自分の個性の一つだと考えている。さらに、ここまで続けてきたことに多少の「自信」や「自尊心」はあり、人から見下されたり、馬鹿にされたくはない。また、サークルの運営、

維持に関しては「責任感」があり、サークルがつぶれないように努力するし、自分も頻繁に欠席してはいけないと思う。それほど強いものではないが、サークルが発展すればよいという「使命感」に似たものも持っている。最後に、サークルの発表会などの成功や、日常的な仲間同士のたわいもない会話の中に「生きがい感」を感じる。

人は、多くの時間、職場では「職業人」、家庭では「配偶者」や「親」の役割をとり、月に一度数時間だけ「社会的サークルのメンバー」の役割を行っている。その役割をとっている時間の長さや、自我関与の程度は違うものの、どの役割も紛れもなく「自分」の役割であり、「自分」を定義づけるものである。しかし、それらの一つ一つがばらばらのものではなく、一人の人間の全体としてのアイデンティティを定義づける重要な構成要素ということになる。つまり、口語的表現をすれば「いろいろな自分、すべて自分」なのである。

こうした考えに基づいたアイデンティティの測定法を大野ほか（2010）が提案しているが、ここで詳細は述べない。

この考え方をもとに、職業からリタイアした老年期からの生き方について考察しよう。ちなみに、昨年度から、本学の立教セカンド・ステージ大学の「壮年期・老熟期の生涯発達心理学」の講義を担当することになり、生涯発達心理学の立場から考えても老年期の重要性を実感しているところである。多くの人が職業からリタイアした時に、自分のアイデンティティを定義づけるもの、自分のアイデンティティのよりどころが「職業」であったことを強く実感する。こ

のことは男性中心の職業観の中で生きてきた古典的発達経路をとった男性に多い。リタイアした後も自分の「自信」や「自尊心」のよりどころが、かつて名の通った会社に所属していたことや、会社の中で高い役職に就いていたことであり、それを周囲の人に話すが、「でも、もうおやめになっているんでしょう」と認めてもらえないことに深く傷つく経験をする。

ここで、上述したアイデンティティの内容についての考え方から、この現象を考え直してみよう。確かに職業人としての役割は過去のものとなった。したがってここにアイデンティティのよりどころを求めるのは論理的にも無理がある。しかし「自分」を定義づけるすべてがなくなったわけではない。

家庭の中では引き続き夫、妻であり、父、母である。孫のいる場合は祖父であり、祖母である。地域の町内会や趣味のサークル、昔からの幼なじみや同期生の仲間などの関係は、職業の有無にかかわらず、継続するものである。職業があるときには、相対的に重きを置かない場合もあったであろうこうした関係の中でも、自分の存在は、不可欠なものとして期待され、そこにはそれぞれの役割に対してのアイデンティティの感覚である「自覚、自信、自尊心、責任感、使命感、生きがい感」がある。自分の全体から職業だけを失ったとしても、それ以外の部分に自分の存在意義は大きいと考えられる。こうした部分に目を向けることは重要なことであろう。

親族や家庭などにおける自分の役割は分かりやすいが、一方で、老年期以降、家族を持たない、もしくは子供の独立と配偶者の死などによっ

て、一人で生活せざるを得ない、人間関係が少なくなってしまう状況の方も多数存在することも考えられる。このような場合、家族や職業に代わる自分の社会的な役割を見つけることも重要である。こうした状況では、受け身の姿勢で生活していても自分の役割を得られる機会は少ないので、ボランティアなどの社会貢献、自らの生涯学習、地域の活動、地域の子どもの育成や世話、趣味のサークル、さらには昔の仲間との付き合い、飲み仲間、あそび仲間であっても積極的に人間関係のある社会、集団、仲間関係を求めることが、自らのアイデンティティの感覚を得る具体的な方法であると考えられる。

5. アイデンティティ概念における他者

次に、アイデンティティの感覚が「内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力（心理学的意味での自我）が他者に対する自己の意味の不変性と連続性に合致する経験から生まれた自信」であるとする、それは「自我＝他者に対する自己の意味」の「自信」であり、アイデンティティの感覚には、他者が不可欠であることになる。ここでは、この「他者」を中心に考察を進めよう。

一般的に、この場合の他者、教員にとっては学生・生徒、一般の商業活動においては顧客、医師にとっては患者、パーフォーマーにとっては観客、夫に対しては妻、親に対しては子、祖父母にとっては孫など、具体的な人間をさす場合も多い。

しかし、研究者として論文を執筆する場合、想定される他者は、読者であるが、論文が発表されたから数十年たって引用される場合、海外

で引用される場合もあり、実際にはだれが読むか分からないので、この場合の他者は特定多数である。これは、小説家とか、音楽家とか、さらには一般向けの商品開発をしている方など不特定多数を想定して仕事をしている場合は相当数ある。このように、ここでの「他者」とは具体的な人物だけでなく、概念的、抽象的他者も含む。したがって心理学の調査などで、例えば「他者を想定して回答して下さい」、その場合「友人とは、最も親しい友人一人を想定して下さい」などという指示があるが、実際の心理学的な心の動きとはだいぶ違うことを研究のターゲットにしていることになる。

さらには、人は「死んだおばあちゃんが、天国から見守ってくれている」などと表現することや「神様が見守っていてくれる」などという宗教的情操もある。そして、こうした認識が、確かに人の行動や考え方、道徳観、倫理観などに影響を与える。この場合、「死んだおばあちゃん」や「神様」は確かに心理学的に他者として機能しており、こうした現象も考えに入れると、他者が実際にその生存する具体的な人物でないことさえ考えることができる。したがって、「他者」は、本人の意識の中にある他者であって、具体的な人物ではない場合も多いことになる。心理学的に他者との関係を考える場合、こうしたメカニズムを考慮する必要がある。

また、この自分をとりまく他者の観点から老年期の生き方を考えてみよう。前節では自己のアイデンティティの観点から、老年期になっても社会とのつながりを維持し、社会の中での自分の役割を意識する、もしくは作っていくことが大切であることを述べた。社会における役割

と、その社会集団での人間関係は、表裏の関係にあり、社会における役割を維持することにとって、その社会における人間関係を維持することが必須の条件となる。したがって、夫婦関係では配偶者を、家族関係では家族を、組織やサークルなどの集団ではそのメンバーが自分の存在を意味づける役割として必須である。したがって自分の自信や自尊心、つまりアイデンティティの感覚を維持するためには、それを支えてくれる周囲の人間関係を大切にはぐくむことも同時に重要なことである。

6. アイデンティティが課題ではなく主題である意味

次に、エリクソンが漸成発達理論の中で、たとえば青年期の「アイデンティティ vs. アイデンティティの拡散」という形で示した内容が、発達課題であるのかという問題について考えてみよう。多くの発達心理学のテキストや、解説書、また一般的な心理学の講義などにおいて、この内容は発達課題であると説明されることも多い。しかし、エリクソンの原著に戻ると、この内容は component（構成要素）という言葉が用いられており、発達課題であるとは述べられていない。

それにもかかわらず、学生たちの認識を会話や、レポートから拾ってみると、『『本当の自分らしさ（アイデンティティ）を青年期のうちに見つけろ』などと言われて大変に困りました。見つけようと思いましたが見つかりません。』『本当にしたいことなど、ありません。』といったいわば拡散の状況を示す意見が大変に多い（大野 2014）。

エリクソンはこの問題に対して、vs. として示された肯定的な内容と否定的な内容の両方の経験とその克服が重要であると述べている。したがって真の意味でのアイデンティティの統合のためには、上述した青年期の拡散の感覚の経験が必要であることになる。こうした拡散の感覚を十分に経験したうえで初めて、アイデンティティの統合の感覚が獲得できるということなのであろう。

エリクソンの青年期の「アイデンティティ vs. アイデンティティの拡散」が自我発達における component（構成要素）であるという説明はなかなか理解しにくい、自我意識が発生し内省が可能となる青年期では「自分のアイデンティティは何か？見つけたいけど見つからない。大変に気になる問題である」という意味で「最大関心事」と説明することが有効であると考えた。個人的には、大変気になる「最大関心事」であり、生涯発達心理学の観点からは、その発達段階の顕著な「テーマ」、「主題」であると考えられるであろう。たとえてみると映画のテーマと同様であり、それは必ずしも解決される必要があるものではない。

職業的なアイデンティティの感覚、つまり自分の職業についてある程度の自信が持てるには少なくとも3年から5年かかる（大野 2014）。そのあとになってみると、自分の職業についてのアイデンティティの感覚は自明のものであり、特に意識することはなくなるが、振り替えて考えると、「青年期のあの時期は、自分がどうしたいのか、どうなるのか、できるのか大変に悩んだ思い出がある」と回顧し、自分の青年期の「最大関心事」であったことを意識すると

このような状況が一般的に多いのだろうと考える。このプロセスがまさにエリクソンの説明した拡散を経験したうえでのアイデンティティの感覚の獲得なのであろう。したがって、青年たちにいたずらにアイデンティティの獲得を求めることは、ずいぶん先の目標を性急に求めていることであり、過大な要求を突き付けられた青年たちが混乱する大きな原因を作っていることになる。「発達課題」という表現は、夏休みの課題のような響きがあり、それをクリアしなければならない、クリアしなければ先に進むことはできない、すなわち、「青年期にアイデンティティを見つけなければならず、それができないと就職することも社会に出ることもできない」というニュアンスを青年たちに伝えている可能性が大きい。しかし、あるべき指導は「ゴールとしては、社会に出てから何年もしてこうした自信（アイデンティティの感覚）を得ることができるようにはなるが、今の段階ではそれを探して悩む時期なのだから、悩むこと自体は健康なことであり、健康に大いに悩みなさい」という言葉かけが重要なのであろう。

7. 危機の解決の本来の意味

青年期の主題が「アイデンティティ vs. アイデンティティの拡散」であることと、その両方を経験し、克服していくことが真の主題の解決であることは、すでに述べた。ここではその両方を経験し克服することの意味を、乳児期の主題「信頼 vs. 不信」を例にとって考えてみたい。

各発達段階の主題を考える上で、重要なポイントは、たとえば、「信頼 vs. 不信」が乳児期（一般的には0歳から1歳半といわれる）の主

題という説明があると、この主題は、0歳から1歳半の間だけにかかわる問題ととらえられることが多いが、この時期にスタートし、一生にわたって影響を及ぼすということが正しい意味内容である。この問題については次節で述べる。

さて、信頼の内容について検討してみよう。信頼は日常会話的な表現では「安心、安心。大丈夫、大丈夫」をいう感覚である。なぜ大丈夫かという明確な根拠はないが、「何となくそう思う、きっと大丈夫だ」と思う感覚である。言い換えると、根拠のない自信といってよい。信頼は母親的存在の愛情豊かなケアによって、子供の中に形成されるとされている。信頼の内容は、第一に、自分は人から愛されるだけの価値があるという感覚であり、第二に、周りの大人は自分を裏切ったり見捨てたりしないという感覚である。そしてこの感覚は、身近な人間関係から、発達にともない社会や自分の将来に対する「きっと大丈夫だろう」という感覚につながっていく。

それに対して不信は、自分を受け入れてもらえない感覚、大人から見捨てられるかもしれないという感覚である。一見、不信は獲得しない方がよいように思えるが、不信の獲得も重要であることについて、日本語の「遠慮」という言葉をキーワードに考えてみる。例えば、友人の家庭の親戚の法事などの集まりに、偶然、出くわしてしまった場合を想定しよう。自分と友人とは近い関係であっても、友人の親戚とはほとんど人間関係もなく、まして、その集まりの趣旨と私の存在が関係ない場合、「遠慮」してその場を離れるのが常識的なエチケットであろう。この場合の遠慮は、その状況に「自分が受

けられない」という感覚である。当然の常識的な行動であっても、その背後には、状況によっては自分が受けられないこと、その参加者にとって私は必要のない、場合によっては気を使わせてしまう迷惑な存在であるという相手の認識を感じ取る能力が働いている。この遠慮は不信の感覚にもとづいている。もし、この不信の一つの表現型である遠慮の感覚を持ち合わせず、信頼しかもっていない人間を想定すると、「自分はいついかなる状況でも人が受け入れてくれ、人の迷惑になるなんて想像もつかない」無遠慮な人間になってしまう。

このように、人は自分の時によっては受けられないかもしれないという不信の感覚を獲得しているからこそ、自分が受け入れられている、見捨てられないという信頼の感覚が具体的な生活の中で生きてくることになる。例えば、相手を大切に扱うとか、必要以上に甘えない、迷惑をかけないなどという配慮の上に立つ信頼が人格形成上必要なのであろう。加えて、当然ながら発達上で、不信を上回る信頼を獲得することが重要で、「基本的には信頼、時々、不信」というバランス感覚が望ましいと考えられる。

8. 漸成発達理論図の主題（最大関心事）の斜め上への移行

ここでエリクソンの示した漸成発達理論図（Fig.1）の各発達段階の主題の関係について述べよう。一般に心理学のテキストなどでは、この発達の8つの主題は、箇条書きとして1次元の配置に紹介されることが多い。しかし、Fig.1のように、本来、漸成発達理論図は8×8のいわばマトリックスに示されている。漸成

発達理論図がなぜ1次元の配置ではなく、8×8のマトリックスに示されているかという問題について検討する。この問題がもっともよく表現されたものとして、エリクソンの妻、ジョーン・エリクソンの手になる織物（わが国におけるエリクソン研究家である西平（1993）がその著書「エリクソンの人間学」の表紙の写真で紹介しているもの）によく表現されている。この織物は、縦糸横糸それぞれ8色の糸で織りあげられている。しかも縦糸横糸の色は同じ順番である。したがって、1番目の糸である青色は、最も左下の長方形の中に最も目立つ純色としてあらわれる。2番目の糸はオレンジ色である。したがって、青色に続く、右斜め上の長方形はオレンジ色の純色としてあらわれる。しかし、縦方向横方向同様であるが、初めの青色の長方形の直上と右隣の長方形は、青色とオレンジ色の混ざったくすんだ色として表現される。同様に8×8のマトリックスで左下の長方形から右上に延びる対角線方向の長方形はすべて鮮やかな純色、それ以外の長方形はくすんだ色として表現されている。このことは人格発達の構成要素の関係を説明しようとした漸成発達理論図の本質をうまく表現している。つまり、乳児期の発達の主題である「信頼 vs. 不信」の主題（青色）は、左下の長方形（乳児期）で最も目立つが、それ以降の発達段階で、人格発達から全く無関係になるのではなく、目立たない形で生涯を通じて人格発達に影響を及ぼしている。そのことは織物の中では、縦糸として青色は最も上の長方形まで存在しており、くすんだ色としてはあるが、それぞれの長方形に混合された色として表現されている。これは「信頼 vs. 不信」

の主題が生涯を通じてそのバックボーンとして影響を及ぼしていることに対応している。これは横方向に関しても同様なことがいえる。対角線方向で次のオレンジ色で示される「自律性 vs. 恥・疑惑」もいきなり第2段階で表れるものではなく、その直下の長方形の中にくすんだ混合色され、人格発達の「自律性 vs. 恥・疑惑」の前駆として内在していることを示している。

すでに示した Fig.1 でエリクソンは、青年期「アイデンティティ vs. アイデンティティ拡散」の青年期以前の各発達段階での前駆と、青年期における各発達段階の主題の青年期における表れを記述している。ちなみに、対角線方向の主題と、第5段階の行、第5段階までの列以外の構成要素についてはエリクソン自身記述していない。

さて、織物などの中で対角線上に純色が並べられている表現されている自我の生涯発達の内容を考えよう。青年期では「アイデンティティ vs. アイデンティティ拡散」の主題が最大関心事になることはすでに述べた。その次の段階、初期成人期では「親密性 vs. 孤立」（他者と本当に仲良くなること、またはそのための自分の能力）が最大関心事になる。この関係は、一般には、青年期では「アイデンティティ」、初期成人期では「親密性」などと単純化されて説明される。しかし、この説明では、青年期で「親密性」はまったく存在しないのか、問題にならないのか、初期成人期以降でアイデンティティの問題は、再発しないのかという疑問が発生する。上述の織物の説明でいえば、青年期でも親密性の前駆としての問題は発生し、初期成人期以降でもアイデンティティの問題は再燃する。

青年期におけるアイデンティティと親密性の葛藤に関しては、大野（1995）が「アイデンティティのための恋愛」という現象を学生のレポートの中に発見し、心理学的な構想を明らかにしている。また、岡本（2007）は成人期以降のアイデンティティの問題の再燃に関して、詳しく検討している。

このように、縦糸横糸で表現されるそれぞれの主題は複雑に絡み合っているが、この最大関心事の変化、移行に関して、特に重要なポイントについて考察しよう。ここまで見て来たようにアイデンティティや親密性の問題は青年期にも初期成人期にも存在する。しかしこれが顕著な形で意識化されるのは青年期ではアイデンティティ、初期成人期では親密性の問題である。しかもその中心課題はアイデンティティでは「この先の人生をどのように生きていくか、何者として生きていくか」であり、親密性では「相手と本当に仲の良い関係をどのように作り上げていくか」である。青年期では、高校卒業、資格取得、大学大学院への進学、進路、就職、跡取り問題、居住地など自分自身の人生に関する問題が多数あり、例えば交際相手ができたとしても、なかなか相手のことを真剣に考える余裕がない（「アイデンティティのための恋愛」大野 1995）。しかし、上述の問題が一通りの解決をみると、次の最大関心事は相手との関係、もしくは、交際相手のいないこと、さらには、自分がパートナーを探しその人と生きていくのか、一生独りで生きていくのかという選択に移って行く。日常会話的表現では「私も落ち着いたので、やっと本気で交際相手との将来のことまで考えることができるようになりました

た」といったものになるであろう。

このようにアイデンティティの問題が一段落すると、アイデンティティの問題と格闘していた時期のことは、過去の問題となってしまう考慮する必要がない。もちろん初期成人期においてもアイデンティティの問題の残滓はあるものの、その焦点、いわばスポットライトは、アイデンティティの問題から、親密性の問題と移行するのである。この移行は、漸成発達理論図の中では斜め右上への移行と表現される。ここで注目したいのは、現在の主題に取り組んでいる、葛藤している状況では、その主題のことで頭がいっぱいになり、ほかのことに関心を向けることもできない。しかし、その問題が一度解決されると、その後の人生で強い関心をもってその問題に立ち戻れることは、一般的にはあまりない。したがって別の発達段階の主題に取り組んでいる別の世代の人たちは、別の発達段階の主題に取り組んでいる人の悩みはなかなかわかりにくい。例えば、青年が進路の問題に深く悩んでいる場合、自分のキャリアが明確になっている大人たちは、「そんなことはたいした問題ではないだろう」「自分の好きなようにすればいいんだよ」「すぐに決まるよ」などという無責任な発言をしてしまうこともある。こうした発言に対して、若者たちの反応は「大人たちはちっともわかっていない」ということになるのだが、実はその大人たちも青年期にはこの問題で大いに悩んだのである。ちなみに、青年期に未解決だったアイデンティティの問題が中年期以降に再燃することは十分にありうるのでこの点について注意は重要である。

9. 生きがい感の源泉としての「愛すること」と「働くこと」

20世紀最大の心理学者のひとりである、フロイトは、晩年、人生で最も重要なことは何かという問いに対して「愛することと働くこと」と答えたというエピソードは有名である。フロイトの孫弟子にあたるエリクソンの漸成発達理論の中にもこの思想は生きている。人は青年期までに、親的存在の愛によってはぐくまれる信頼感から始まり、自律性、主導性、生産性を身につけ、アイデンティティの主題に到達する。アイデンティティは、自分がこの世の中に何をするために生れて来たかという問いであり、自分の生きる意味の証明である。したがって、職業に限定されることなく、つまり対価を得られるかどうかにかかわらず、何者して生きていくかという問題である。したがって、職業以外にも、作品が売れなくても芸術家として生きていく、ボランティアの社会貢献に精力を傾けるなどの生き方を選ぶこともありうる。青年期以降、選択したアイデンティティを「実践」することは、自分の生き方に意味を与え、大きな生きがい感の源泉となる。

また一方で、乳児期から親的存在に愛される受動的存在であった人間が、青年期が終わった後はじめて、人を愛する能動的存在として生きることになる（ちなみに兄弟などがいて、人を愛することを青年期以前に経験することもあり得るが）。主に交際相手や配偶者を対象として形成される初期成人期の「親密性」が、成人期では、対象を広げて「世代継承性」、次の世代の育成への関心、次の世代に残すものを作り上げることへの関心に移行していく。社会的に一

応の役割を達成した人が、次に興味を持つのは、次の世代の育成である。例えば、引退したプロ野球選手たちが子供野球教室を開く。また、キャリアを引退することになった人たちが気になることは、自分のやってきた仕事を引き継いでいく人たちが育ってきたかである。そして、この次世代の育成がうまく行く場合、これもまた大きな生きがい感の源泉となる。その点、教員はまさにこの世代継承性に基づいた職業であり、日々、次世代の育成を行っているといえる。

教員を例に挙げて、この「愛することと働くこと」の内容について吟味してみよう。青年期に選び取った教師という職業をキャリアとして数十年継続することは、まさに自分のアイデンティティの実践することである。加えて、教師という職業を通じて次世代を育成することは世代継承性の実現である。このように教師という職業は、一方で自己のアイデンティティの実現であり、一方で世代継承性の実現でもある。漸成発達理論には、信頼（基本的信頼*）、自律性、主導性(自主性*)、生産性(勤勉*)、アイデンティティというアイデンティティ形成の経路と、信頼感、親密性、世代継承性という愛が形成される経路の二つがあるように考えられるが、この二つの経路は、青年期において、「世代継承性」という形で結実する。その内容は、フロイトのいう「愛することと働くこと」である。

生涯発達の観点から考えると、これまで自分がどのような人生、アイデンティティを選んで実践してきたか、さらにそれを支えた重要な他者との人間関係、世代継承するとしてどのように社会に貢献してきたか、生きた証として何を残してきたかを振り返って考えてみるのが重

要であろう。さらに、どんな年齢になったとしても、新たな社会参加、仲間づくりを通じて、新たな自分の存在意義、アイデンティティを模索することも大切である。エリクソンは人生の最後の主題として、今回の人生が「ああ、よい人生だった」と納得して受け入れられることを「統合性」（自我の総合）と述べた。人生の最後の最大関心事はこの「統合性」である。老年期にいたって、この「統合性」を感じることできる人生にしたいものである。

脚注 * Fig.1 内での表記 訳語は確定されていない。

引用文献

- Erikson, E.H., 1959 Identity and life cycle : Selected papers. In Psychological Issues. Vol.1. New York, International Universities Press. [エリクソン 2011 アイデンティティとライフサイクル 西平直 中島由恵です訳、誠信書房]
- 岡本祐子 2007 アイデンティティ生涯発達論の展開 ミネルヴァ書房
- 岡本祐子・上手由香・高野恵代 2007 世代継承性研究の展望－アイデンティティから世代継承性へ－ ナカニシヤ出版
- 大野 久 1995 青年期の自己意識と生き方 落合良行、楠見孝編 講座生涯発達心理学 4巻 自己への問い直し：青年期 第4章 Pp.89-123.
- 大野 久 2010a アイデンティティ・親密性・世代性：青年期から成人期へ 岡本祐子（編著） 成人発達臨床心理学ハンドブック

- ク一個と関係性からライフサイクルを見る ナカニシヤ出版 pp61-72.
- 大野 久 2010b エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房
- 大野 久 2014 高校の生徒・進路指導におけるアイデンティティ概念の誤用と弊害 教職研究 25 1-9.
- 大野 久・三好昭子・茂垣まどか・キン・イクン・今井美智子 2010 質的・量的心理・社会的アイデンティティ接近法の提案 日本青年心理学会大会発表論文集 18, 43-46.
- 西平 直 1993 エリクソンの人間学 東京大学出版会